平成 28 年

９月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課（農業革新支援センター）の取組～

岐阜県農政部農業経営課

平成２８年９月の普及活動状況ダイジェスト版

活力ある新産地づくり

中濃農林■ゆず　Seki-Biz を活用し経営改善支援

関市では７月19日に関市ビジネスサポートセンター（Seki-Biz）が開設され、中小企業の経営改善をサポートする体制が強化された。かみのほゆず(株)が、個別相談を申し込み、販売強化に関するアドバイスを受けた。相談会には農業普及課も同席し、ゆずの生産状況や会社の課題について説明した。３回開催された相談会の中で、通常よりも早い時期に収穫する「早どりゆず」を使った加工品についてSeki-Bizから提案があり、「早どりゆず」を使ったゼリーの企画を進めることになった。11月12日に数量限定で販売開始する予定である。

【相談会の様子】

多様な担い手づくり

西濃農林■トマト　就農支援センター第２期生の定植作業始まる

９月１日よりトマト就農支援センター第２期生の定植作業が始まった。第２期生は、３組（４名）が、海津市（海津トマト部会員）で就農し、農業普及課としても重点的に週２回の巡回支援を行っている。作業の時間割（明確化)、生育状況の把握とそれに伴う養液管理（ＥＣ、給液回数、排液率)、給液のチェックと洗浄を各自が意識して実行するように助言を行っている。定植から３週間程度経過したが今のところ生育は順調である。今後も適切な給液管理等を就農支援センターと連携し助言を行っていく。

【定植作業の様子】

揖斐農林■揖斐地域農業担い手応援大会開催　揖斐就農応援隊の設立

県では次代の農業を担う新規就農者をはじめ、集落営農組合、農業法人などの育成・確保を加速させるため、関係機関と連携し、農業関係以外の方々を含めた地域ぐるみで新規の就農者を支援する「就農応援隊」の設立を推進している。

揖斐地域では８月 31 日にＪＡいび川、３町、揖斐農林事務所からなる揖斐地域就農支援協議会の主催で、揖斐地域農業担い手応援大会が開催された。応援大会では、揖斐就農応援隊の結団式が催されるとともに、「第 19 回全国農業担い手サミット in ぎふ」の開催概要が紹介された。また、新規就農者・若手農業者からは、今後の営農展開に関する決意表明が行われた。

【揖斐就農応援隊結団式】

農業普及課からは、揖斐地域の新規就農者の育成の取り組みについて報告した。

可茂農林■就農支援　就農応援検討会の開催

９月６日に可茂農林事務所で呼びかけを行い、就農応援検討会を実施した。新規就農者が比較的多い、白川町・東白川村で移住定住を伴う新規就農者を、地域全体で受け入れる体制を構築したいとの考えで、可茂農林事務所より、最初のステップとして、その検討の場の設置について提案した。

検討会に参加していただいた白川町・東白川村の担当課長やＪＡめぐみのの常務理事、営農関係の責任者、現在研修生を受け入れている生産団体の方々は、その主旨に賛同いただき、次回は農業関係以外の団体も交えた検討会を結成する方向で進めている。

【検討会の様子】

下呂農林■新規就農　就農者を求め東へ西へ

下呂市内では、新規就農者の確保に積極的に取り組んでいる。

そこで、下呂地域担い手育成総合支援協議会では、2016新・農業人フェアに参加した。９月10日には東京会場、22日には名古屋会場に参加した。

当日は、市役所、ＪＡ担当者らとともに、会場を訪れた相談者に対し下呂市での就農をＰＲした。相談者は２日間で35名に上り、今後は長期研修への誘導を働きかけていく。

農業普及課では、就農者の確保に向けた支援を継続していく。

【相談ブースの様子】

売れるブランドづくり

岐阜農林■えだまめ　夏期高温時の発芽対策現地研修会を開催

９月２日、ＪＡぎふえだまめ部会は、島集荷場の隣接ほ場において、部会員を対象に、タイベック使用による夏期高温時の発芽対策について現地研修会を開催した。

農業普及課から、今年度実施した 10 か所の展示ほの発芽率や地温データなどの結果を報告し、高温時の発芽対策として、タイベックの使用が有効であることを説明した。また、は種後にタイベックを被覆したほ場の発芽状況を確認してもらい、設置方法や除去する時の注意点などを説明した。参加した生産者からは、「タイベックを被覆したマルチの上は、ひんやりしている」などの感想があった。

【現地研修会の様子】

今後、農業普及課では、タイベックの次年度導入に向け、関係機関と連携して産地に働きかけるとともに、全生産者を対象とした栽培研修会で、再度使用方法などの説明を行い、技術の普及を図る予定である。

郡上農林■ほうれんそう　夏期の生産安定・梨地フィルムの効果

ほうれんそうの雨除け栽培では、夏期の安定生産が収益向上のポイントとなる。

奥美濃ほうれん草出荷組合では、これまで盛夏期の高温が生産の不安定要因であったため、今年梨地フィルムを雨除けハウスに展張する試験を３農家で取組んだ。

梨地フィルムで被覆したハウスでは、従来フィルムに比べハウス内の気温や地温を低下させ、ほうれんそうの葉からの水分蒸散を抑えて適切な水分を保持できるため、安定した生産が可能となった。

農業普及課では、梨地フィルムの調査結果を生産農家に示し、次年度以降の導入を検討する。

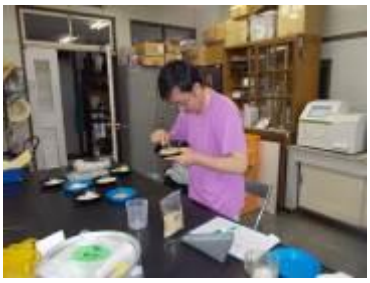
【梨地フィルム被覆下での生産の様子】

恵那農林■水稲　「東美濃産コシヒカリ」極（ごく）良食味米生産プロジェクト実証ほの分析開始

農業普及課では、関係機関と一体となり、本年度から「東美濃産コシヒカリ」極良食味米産地確立プロジェクト活動を展開している。

活動の一環として、作付地の標高と移植時期の違いによる食味の変化について検証するために管内に設置した実証ほ31か所について、品質、食味分析を開始した。

９月 28 日に、県農業技術センターの協力を得て、ＪＡひがしみのと農業普及課が連携して品質、食味分析を行った。



【品質、食味分析の様子】

同プロジェクトでは、今後も実証ほ場から採取したサンプルについて同様に分析を実施し、その結果について取りまとめた後、生産者等に対して栽培改善点の提案等を行い、良食味米産地の確立に向けた取り組みを推進する。

飛騨農林■水稲　新たな「売れる米づくり」を目指して

飛騨地域各地で水稲の収穫作業が大詰めを迎える中、9 月 30 日に高山市上宝町の機能性成分米「はいごころ」栽培実証ほ場において、関係者が見守る中で収穫作業が実施された。

「はいごころ」は通常の米に比べて胚芽が大きく、血圧上昇を抑える機能があるとされるギャバ（γ－アミノ酪酸）の生成能力が通常の米よりも優れる品種で、機能性成分を活かした新たな需要拡大が期待されている。

農業普及課では、収穫された米の収量や品質等について今後調査を行うとともに、実証結果に基づく作付拡大の可能性を検討し、新たな需要に対応した「売れる米づくり」の取り組みを進める。

【収穫作業の様子】

農業経営課■飛騨牛　飛騨牛飼育農家の巡回指導

昨年度から飛騨総合庁舎（飛騨家畜保健衛生所）内に農業経営課地域支援係高山市駐在１名が配置され、飛騨・下呂地域の畜産技術普及を行うこととなり、獣医師の資格を持つ革新支援専門員が飛騨家畜保健衛生所、市、飛騨農協、診療獣医師等と連携して飛騨牛飼育農家を巡回し、主に飼料給与の改善を通じて農家の課題解決を図っている。肥育農家では脂肪交雑（サシ）の向上だけでなく肉色・枝肉重量の改善や代謝病予防が課題となっており、現在の飼料給与を基本に肥育牛のステージ毎に必要なミネラルやタンパク質を過不足なく給与する飼料給与プログラムの改善案を策定している。繁殖農家では、子牛の発育改善とともに繁殖牛の分娩間隔（子牛の分娩から次の子牛分娩までの日数）短縮が大きな課題となっている。畜産研究所の飼料分析や家畜保健衛生所の血液検査結果等に基づき農家別に適正な飼料給与量の指導を行っているが、平成27年度の分娩間隔（(公社）全国和牛登録協会調べ）は全国平均412.4日に対して岐阜県は393.0日と47都道府県中最も短く、その中でも南飛騨和牛改良組合（下呂市）は382.2日と全国453和牛改良組合中最も優秀な成績を収め（公社）全国和牛登録協会からの表彰を受賞した。従来本県には牛の飼養管理を綿密に指導する組織が存在しなかったため農家から研修会の依頼や飼料給与に関する質問等が寄せられている。

【繁殖雌牛の採血風景】

住みよい農村づくり

東濃農林■　直売所の出荷者育成及び出荷量増加に向けて

瑞浪市では農産物直売所「きなぁた瑞浪」の地元野菜の出荷量の増加及び新規栽培者を育成するため、７月より毎月１回「みずなみ野菜づくり塾」を開催している。

今年度の受講生は 11 名で、開催にあたっては室内講義については農業普及課が講師を担当し、屋外実習はＪＡ職員が講師となって技術支援をしている。

塾を開講して以降、受講生２名が新たにきなぁた瑞浪の出荷者となっており、野菜づくり塾開催の事業効果がみられている。

今後は、野菜づくり塾を３月までに全８回を予定しているが、地元野菜の出荷が少ない厳冬期や春先に出荷できる栽培体系を中心に講義を進めていく。

農業普及課としては、関係機関と連携して今後も支援していく。

【野菜づくり塾の様子】